

## そこにある勉強ではなく、そこにはない勉強で跳躍を！！

イギリスのタイムズ誌高等教育版 (Times Higher Education) によれば、09年の世界ランキングで、東京大学22位、京都大学25位、大阪大学43位、東京工業大学55位とつづき、因みに1位は米国ハーバード、2位英国ケンブリッジ、3位米国イエール。10年度はまだわかりませんが、下降はしても上昇はしていないのでは……。この事態から、教育の国際化の後れを見て取って、教育の「ガラパゴス化」が指摘されました。私たちは上記の順位を知らなくても、高学歴の各界、特に政治家のため息しか出てこない言動をたっぷりと日々見せつけられて、東大や京大出てもこの程度か、と啞然としながら、高学歴のバカバカしさを実感してきました。このバカバカしさのなかで、鉢巻きをして東大、京大を目指して必死にがんばる受験生の姿や、塾の光景がテレビによく映し出されます。

やれやれですね。22位の東大を目指してコップの中で競ってるんですから。東大に行って官僚になり、政治家に転身して、私たち有権者に愛想を尽かされるという、これまで繰り返されてきた茶番を性懲りもなく演じるんでしょうね。もうそんな体たらくではやっていけない崖っぷちに、日本も世界も立たされていることはだいたいの人が感じているはずです。受験体制の中でしのぎを削って勝ち進めば、なんとかなるさ、ではもうどうにもならんのですよ。受験体制で萎縮した秀才や小才では難局に立ち向かえず、世界は大才をもってしか動かせないでしょう。なぜなら、難局は受験体制の外に渦巻いているからです。

明治維新でいえば、大才の人として西郷隆盛と横井小楠がすぐに浮かびますが、私たちにはとても西郷や小楠のような人物は目指せなくとも、大才への途を歩むことはできます。彼らのような大きな大才は無理でも、小さな大才ならなんとかが手が届きます。受験教育の秀才たちが小さな大才にすらなれないのは、彼らの歩む途がマニュアルで敷き詰められているのに対して、大才への途は自分の力で切り開かなければ現れてこないからです。現実も、人生も、マニュアルどおりにはならないし、シナリオなどのない、ぶっつけ本番で向かわなくてはならない世界です。勉強も同じなのです。

知られていない小楠について少し説明すると、龍馬の考えは彼の受け売りで、「学問を致すに、知ると合点との異なる<sup>ところ</sup> 処、ごご候」「専<sup>もつぱら</sup>己に思ふべく候」、本を読んで知ってもなんの意味もない、自分が「合点する」、つまり自分の思考が引き出されるように読まねば、すべては<sup>ざる</sup>策だ、と言っています。人物としてのスケールの大きさは、日本中が「攘夷」だの「開国」だのと刀を振り回しているときに、「紅海の海峡を掘りぬき海路とする等のこと誠に莫大の利なり」と、遠く世界に目を向けて、スエズ運河の経済効果を説いていたことに現れています。何とも気宇壮大な男でしたが、残念ながらあまりにも開明すぎる思考のため、時代の暗愚の中で暗殺され、歴史に埋もれてしまいました。

こんな話を思い出します。試験には全部の問題に目をやって、出来る問題から解いていくという常識があります。手強い問題は後回しにして、易しい問題を先に片づけて点を稼ぐのです。しかし、難しい問題を解きたいという気持が強くて、この常識に逆らった少年がいました。もう一步のところまで時間内に解くことができず、他の問題は手つかずのままだったので、点を稼げず全滅でした。仮にその難問を解いたところで、5問中1問正解で20点です。私が試験官だったら、その難問を80点と

して、途中まで必死に解いた彼に70点を付けます。なぜなら、彼は一番難しい問題に挑戦して、あと一步まで追いつめたからです。彼なら、他の問題を楽々と解け、点を稼げたにちがいありません。しかし、彼は出来る問題よりも、出来ないかもしれない問題にあえて挑戦してみせたのです。

いまの受験体制では、彼のような少年はバカとみなされ、出来る問題をマニュアルどおりに解いて、点数を稼ぐ者がのし上がっていくようになっていきます。そんな勉強ばかりを繰り返してきた人間は、実社会でも自分の手に負えそうにない仕事には取り組まず、自分が歩きやすそうな途ばかりを選ぶのではないのでしょうか。日本の現状を見ていたら、つくづくそう思われます。同じようなひ弱な子どもがひ弱な大人になって、右往左往していくにちがいありません。おそらく難問に挑戦した少年は全く評価されなかったために、もう二度とそんな無茶をせずに、点数稼ぎの仲間の中に入っていくことになるでしょう。本当はそんな少年こそ励まし、育てていかねばならないのに、日本の社会は引きずり下ろして均一化、画一化してしまうのです。

1960年代の中頃に創刊されて、若者に人気を博した雑誌『平凡パンチ』にこういう逸話があります。たぶん初期の頃、採用枠2名を募集したところ、数百人の応募があり、トップとビリの2名が採用されたそうです。そのビリは後に直木賞作家になっていますが、なんとも痛快な採用基準で、『平凡パンチ』が20年以上も受けつづけた理由がわかります。並の会社ならトップとその次を採用したでしょうが、そうしなかったのは、読者はむしろトップのような若者ではなく、ビリに近い連中が多いことがわかっていたからです。それでも会社としては成績のよいトップは捨てがたかった、それでビリと共に採用したと考えられます。そのビリも後の直木賞作家になるほどだから、見所のあるビリだったにちがいありません。勢いがあるときは破天荒な試みもやってのけ、そしてますます勢いを増していく、という一つの例です。

さて、わくワク塾について語りましょう。前号でも不思議な勉強の一端を示唆しましたが、これまでにない勉強を模索しているために、語り口もなかなかめらかなにはなりません。これまでにないことをやろうとするときには、これまでにない話し方をしなければならず、どうしても既成の話し方はできないからです。これまでにないなにかをやろうとしているのだな、ということを感じて下されば、本望です。私も猛勉強しなければならず、たとえばわずか数千の戦力の信長が4万もの今川勢を打ち破った桶狭間の戦いを知るには、記述をなでて暗記しても駄目で、そのときの信長の立場に立ってみるなかで、自分ならどうしたか、を考えるのが歴史の勉強だと思います。そのためには、当時のことをたくさん調べなければなりません。コロンブスの新大陸発見にしても、彼の名誉欲や物欲だけでは命がけの航海を冒す理由が見えてきません。部下の何千人もの乗組員は別の積極的な理由がなければ、彼の冒険には従わなかつたらうからです。

当時の真っ只中に自分を立たせて考えるのが、歴史の勉強であり、面白さなのです。暗記などしなくても、面白くて覚えてしまいます。先の戦争一敗戦にしても、後世に立って安易に批判するだけでは、なにも見えてきません。父親、祖父の世代の味わった戦争体験について真正面から考え、本当に批判するのであれば、では自分なら、そのときどうしたか、異なる対応、行動が可能であったか、を自らに厳しく問わなくてはなりません。安易な批判で終らせないためにも、自分にたえず問い続ける勉強が不可欠であり、歴史とは相手の身になって考える勉強なのです。